

「井伊直虎、直政の時代」 『開国の元勳』井伊直政の原点

市橋 章男 氏

1954年岡崎市生まれ。國學院大學で史学（古代史・中世史）を専攻。教職員を退職した後に故郷岡崎にかかわる歴史・人物の著作活動を始める。新編岡崎市史調査員。おかざき塾歴史教室主宰。

【講演要旨】

本日は、「作左の会」の総会にお招きいただき、講演をさせていただきます。ありがとうございます。
「作左の会」を皆さんのお力で長く続けられていらっしゃいます。本当に素晴らしいことだと思います。本多作左衛門ゆかりの地はいろいろありますが、こちら（宮地町）は『生誕地』ということですから、自慢していいと思います。これは一カ所しかないんですから。今後も、是非大切にしていっていただきたいと思います。

こちらに来て思い出すのは、もう20年前になりますでしょうか、六ッ美西部小学校開校時に赴任することになりましたが、来てみると建設が遅れていました。膨大な備品等は皆体育館に入れてあり、紛失の恐れもあるので泊り込みをすることになったことです。

その当時は、土井町に「スーパー銭湯」と「天井屋」があり。天井を食べてスーパー銭湯に入って学校に帰るという毎日でした。天井は好きでしたが、さすがに食べたくなくなりました。

在任時には皆さんにお世話になりました。ありがとうございました。



本題に入りますが、この写真の3人は誰でしょう？。左は、徳川家康です。浜松城公園にある「若き日の家康像」です。31歳の頃をイメージしたものとされています。（家康は、29歳から46歳までの17年間、浜松城に在城）

右は、今年のNHK大河ドラマの主人公・井伊直虎です。では、中央は誰でしょう。これは、彦根駅前にある井伊直政像です。

〈参考〉 井伊直政とは？

戦国時代から江戸時代前期にかけての武将・大名。井伊直親の子として生まれる。養母は井伊直虎。15歳のときに家康に見出され、徳川家の家臣となり、井伊家の大繁栄を築いた興隆の祖。（徳川四天王・徳川十六神将・徳川三傑）。彦根藩（入封時は佐和山藩）初代藩主…彦根市発展の礎を築いた。享年42。

◆「開国の元勳」… 国家を開いた二人の井伊氏

（1）井伊直弼 — 「日米修好通商条約」の締結

今年の大河ドラマは井伊直虎ですが、最初の大河ドラマは何でしたでしょうか。54年前です。「花の生涯」でした。主人公は、井伊直弼です。（直弼は、直政から始まった彦根藩の15代藩主）井伊直政は「開国の元勳」と言われています。しかし、今「開国の元勳」と言えば、皆さんなら誰を思い浮かべますか。私は、井伊直弼を思い浮かべますね。

御存じのように、井伊直弼は幕末の江戸幕府の大老でした。そして、日米修好通商条約に調印し、日本の開国近代化を断行し、『開国の元勳』と呼ばれています。

〈参考〉



(ペリー来航で始まった)幕末の幕府は、尊皇攘夷(君主を尊び、外敵を斥けようとする思想=鎖国を守れ)運動の大きな流れの中で、まさにつぶれそうになっていました。その時に大老に就いたのが、井伊直弼です。大老職(政治をする上で難しい問題が起こったときなどに、人材として臨時でおかれる特別職)は、江戸時代に10人いますが、そのうち5人は彦根(井伊家)からなんです。

井伊直弼は、その後の治安回復のために行った、吉田松陰などへの弾圧(安政の大獄)のイメージから、今も、悪役の印象が強いのではないのでしょうか。結果、桜田門外の変で暗殺されてしまいます。しかし、これテロです。許されないことです。その時代の理由があったと言えば、現代のテロもすべて許されてしまいます。直弼も自分のためにしたんじゃないんです。世の中のために決断したんです。

〈講演資料〉 直政の遺言より

井伊家は、徳川殿のお取立てによって、今日があることを忘れてはならぬ。徳川家へのご奉公を第一につとめること、忠節第一と心掛けよ。これは代々家を継ぐものに必ず申し送るようにせよ。今一つ、井伊家では将軍家や御一門など、権勢が高いお家とは婚姻を結ばないように心得よ。家臣であるという分を超えてはならぬ。

〈参考〉 井伊直弼の和歌

安政の大獄が一段落すると、直弼は自分の姿を絵師に描かせ、先祖のお墓がある清凉寺(彦根市)に納め、絵の上には、そのときの気持ちをよんだ和歌を書きました。

あふみの海 磯うつ浪の いく度か 御世に心を くだきぬるかな

—近江の海(琵琶湖)で磯に何度も打ちつける波のように、私も世の中のために心を尽くしてきたなあ—

ところで、江戸時代は鎖国していたと言いますが、鎖国というのは、この時代を閉鎖的にとらえることにつながってしまいます。実際には4つの国と貿易していました。アメリカ、イギリス、フランス、ロシアとはこれ以後になります。

※幕末の歴史観について

幕末の幕府の外交については評価が低いですが、これは、新政府に都合のいいように作られています。しかし、幕府は、やることはきちんとやっていました。

例えば、ペリー(黒船)が来航した時、乗船して最初に交渉にあたったのが、中島三郎助(浦賀奉行所の与力)ですが、本当は英語がペラペラなのに、全く知らないふりをして、こちらがわからないと思ってしゃべっている先方の会話を聞いて手の内を探り、その後の交渉に役立てました。(最近、北海道大学で出てきた資料により、確認されました)

こうした情報収集の結果、幕府は、返答に1年の猶予を要求しましたが、その結果、ペリーは「返事を聞くために1年後に再来航する」と受け入れました。そして、1年後の来航に備え、江戸湾の入口(品川沖)に海上砲台(砲台用の台場)を11基築造することとしました。1年の時間かせぎをして備えを固めたのです。東京の「お台場」の地名はここからきています。

〈参考〉 お台場

結果は8つの台場を建設。この砲台は十字砲火に対応し、正面からだけでなく、側面からも攻撃を加えることで敵船の損傷を激しくすることを狙った。結果、ペリー艦隊は品川沖まで来たが、この砲台のおかげで横浜まで引き返し、そこでペリーが上陸することになった。結局、この砲台は1度も火を噴いていない。幕府に敬意を払って台場に「御」をつけ、御台場と称した。

(2) 井伊直政 — 『寛永諸家系図伝』にある「開国の元勳」

*江戸初期に作成された、大名系図「寛永諸家系図伝」などでは、直政を「開国の元勳」と評し、「関ヶ原の戦いに勝利して幕府を開いた」(天下平定の)功労者と讃えている。

〈講演資料〉 「寛永諸家系図伝」より

大権現様が大阪ご入城せられ天下一統の上で、各諸将を国郡に封じた後直政を召され、御前にて天下の大戦の都度先鋒の将として勝利したことは誠に「開国の元勳」なり。

今回ここに(回茲)今度の敵将石田治部少輔居城佐和山並にその領地を賜る旨仰せ出され、佐和山城とその江州(近江国)の領地十八万石を拝領、翌年正月入部せしめ、特に従四位下に叙せられる。

同七年二月逝去四十二歳

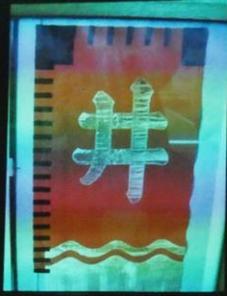
赤備え具足

井伊氏の旗印

小牧長久手の戦い



小幡氏紋付赤備え具足
(群馬県甘楽郡甘楽町)



朱地井伊氏旗印



井伊直政「赤備え」軍団のデビュー

井伊直政の軍は、「井伊の赤備え」（武田の山県昌景から継承した全身を赤くあしらった軍装）と呼ばれていました。井伊直政本人も赤備えを纏い、「井伊の赤鬼」として恐れられていました。直政は、①侍大将として「軍事的な活躍」をすることだけでなく、②徳川の外交官としての交渉役でも力を発揮しました。その結果、家康の信頼を得たのです。

交渉役としては、関ヶ原の合戦後にも、（西軍の総大将であった）毛利氏や、島津氏などとの交渉でも成果を出しています。

天正10年（1582年）秋ごろ、22歳で元服して侍大将になっています。同じころ、直虎が亡くなりました。（直虎 天正10年8月26日 没）

合戦屏風（前ページ）は小牧長久手の戦いです。この戦いが「赤備え」の最初の出番となりました。

◆「徳川四天王」

ところで、（多くの家臣のいる中で）徳川四天王はどうやって決まったのでしょうか？
実は、秀吉の目の前で活躍したからなんです。

小牧長久手の戦いの時、

- ①酒井忠次は、（小牧山を狙っていた森長可の陣である）羽黒城を攻め落とした後、要衝である小牧山に本陣を確保しました。（家康が長久手に進む時は小牧山本陣を守備した）
- ②榊原康政は、秀吉の織田家の乗っ取りを非難する檄文を書いた立札を立て、これに憤怒した秀吉は康政の首を獲った者には10万石を与えるという触れまで出しました。10万石の首なんです。しかし、和平後には許されています。
- ③本多忠勝は、わずかな兵（500名）で（大軍の）秀吉を威嚇し、秀吉軍の動きを遅らせました。秀吉はその時、勇猛ぶりを讃え、討ち取るべしという家臣の進言も聞き入れませんでした。
- ④井伊直政は、「赤備え隊」が先鋒として奮戦し、激突した森長可（森蘭丸の兄）は討ち死にすることとなりました。

秀吉は、目の前で活躍した彼らの働きを評価しました。四天王は秀吉の評価から決まったんです。勇猛な彼らを気に入った秀吉は、四天王を家臣にしようと思いました。（たびたび引き抜き勧誘）しかし、彼らは（決して家康を裏切ることなく）家臣になることを拒否しました。

そこで秀吉は、彼らに叙爵（古代・中世の日本においては貴族として下限の位階であった従五位に叙位されること）したんです。位階を与えられることにより、彼らは「天皇の侍従」となります。その結果、家康はじめ四天王も、すべて自分の配下となったわけです。

酒井忠次	…	従四位下左衛門督
榊原康政	…	従五位下式部大輔
本多忠勝	…	従五位下中務大輔
井伊直政	…	従五位下修理大夫



彼らの武勇を評価した秀吉の後押しもあり、その後、榊原康政の首の価値と同じ10万石を与えることとなります。しかし、井伊直政だけは12万石でした。なぜでしょう。それは、秀吉の母親である「大政所」が直政のこと好きだったからです。

小牧長久手の戦いの後、一向に上洛しない家康に対し、妹の朝日姫を正室として輿入れさせました。それでも家康は上洛しません。そこで、実母の大政所を人質として岡崎に送ったのです。

その時の岡崎城城代が本多作左衛門でした。作左衛門は上洛した家康の身を案じ、大政所の居るまわりに薪を積み上げ、もし、家康の身に何事かが起これば、火を付け大政所を焼き殺す姿勢を示しました。

〈「作左通信」から〉 鬼作左；大政所の扱い

小牧・長久手の合戦（1584年）の後、豊臣秀吉は、実母の大政所を人質にさし出してまで、家康を上洛（京都へ行くこと）させました。
ところが、家康の留守中、岡崎城の一角、大政所の住居の周りにはなぜか薪が積み上げられていました。作左衛門は、上洛した家康に万一のことがあれば、直ちに人質の大政所を焼き殺すつもりでいたのです。
しかし、家康の身を案じたこの行動が、秀吉の怒りに触れてしまいました。さらに、作左衛門はこの仙千代を上洛させず、また小田原出陣の際も、秀吉から岡崎城へ招かれましたが、ついに見参しませんでした。
こうしたことから、作左衛門に切腹の命令が下されました。その後、家康のおかげでろうじて命は救われましたが、下総国（茨城県取手市）に追放されてしまいました。

本多作左衛門重次



〈参考〉

一方、井伊直政は、大政所を丁寧にもてなし、警護をし、大阪にも送り届けました。それが、一人だけ2万石多い理由です。

◆ 大河ドラマ「おんな城主 直虎」の背景 — 井伊家の悲劇

井伊家は、今川氏支配下で翻弄されますが、もともとは「国人衆（国衆とも）」でした。国人衆というのは、鎌倉以来、主に「地頭職」だった在地武士たちです。井伊家も、由緒ある国人衆ですが、20代目の井伊直平より今川氏に服属を強いられました。
そして、井伊家の男子は次々と死んでしまうんですね。

〈講演資料〉 今川氏支配で翻弄される井伊家

- 第21代 直宗 … 天文13年（1544）今橋城攻めで戦死。
- 臨時当主 直満 … 天文13年（1544）武田氏との内通容疑で斬死。翌年、子の直親（亀ノ丞）は信州市田郷の松源寺に隠遁（10歳）。弘治元年（1555）亀ノ丞、井伊谷に帰国。22代当主直盛の養子となる。
- 第22代 直盛 … 永禄3年（1560）桶狭間の合戦で戦死。
- 第23代 直親 … 永禄4年（1561）直政（虎松）生誕。翌年、松平元康との内通を疑われ、殺害される。虎松は、母親と共に、新野左馬之助屋敷に保護される。

※国人衆

真田氏も国人衆です。（信濃国小県郡（ちいさがたぐん）の国人衆）
本多氏は、大分出身の国人衆です。足利尊氏について上ってきたんです。

松平氏は国人衆ではありません。松平郷の農民上がりの地侍・土豪だったんです。
（家臣だった）本多氏の方が、家系的には由緒があるんですね。

南北朝の争い以後、国人衆の勢力に変化があるんです。
南朝側についた国人衆は衰退し、北朝側についた国人衆は勢力拡大しています。井伊は南朝側につき、今川は北朝側でした。

この南北朝時代に、井伊氏（道政）は、後醍醐天皇の息子（第四皇子で南北朝時代に征東将軍として関東各地を転戦した宗良親王）が、井伊家を頼って落ちてきた時、井伊谷城に迎え入れ保護しました。

龍潭寺の奥にある「井伊谷宮」（井伊谷にある神社）は、宗良親王を祀っています。社殿の背後に墳墓があります。今年の研修旅行は龍潭寺へ行かれるそうですが、是非、井伊谷宮にも足を運んで下さい。龍潭寺は人が多いですが、こちらは静かです。

※遠江国

遠江の国人衆は次第に今川氏の家臣となりますが、井伊氏の所領は交通の要衝なんです。

浜名湖が地震で海とつながり不通に。



◆ 龍潭寺

直虎と虎松



井伊家家臣の墓



直虎の墓

直親の墓



〈参考〉

（井伊家の菩提寺である）龍潭寺には、領主だけでなく、一緒に家臣たちの墓もあります。これは珍しいことです。家臣を大切にしたのでしょね。

注①奥山家墓所

…十代親朝、十一代朝利、十二代朝宗

②中野家墓所

初代直房、二代直村、三代直由、四代直之

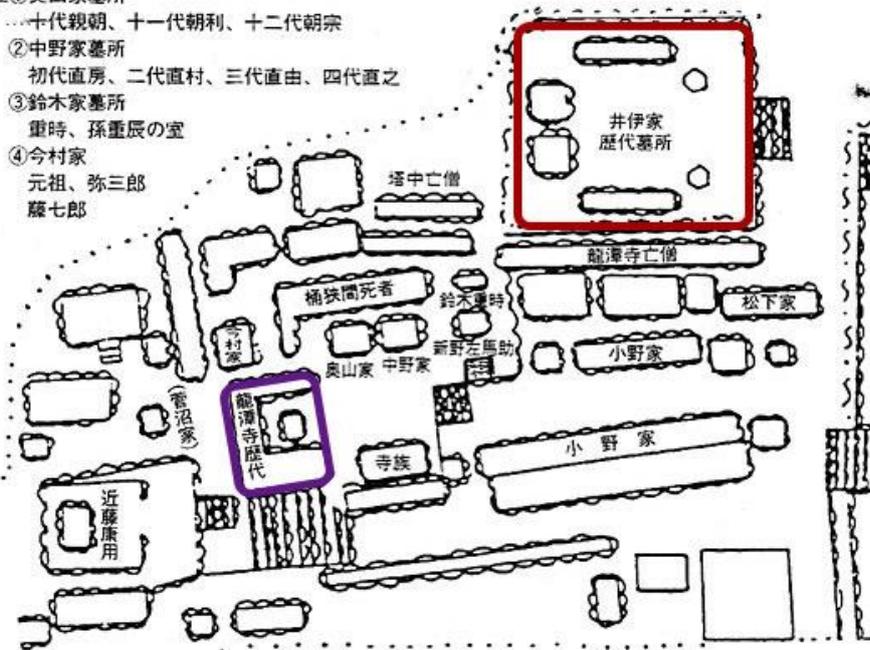
③鈴木家墓所

重時、孫重辰の室

④今村家

元祖、弥三郎

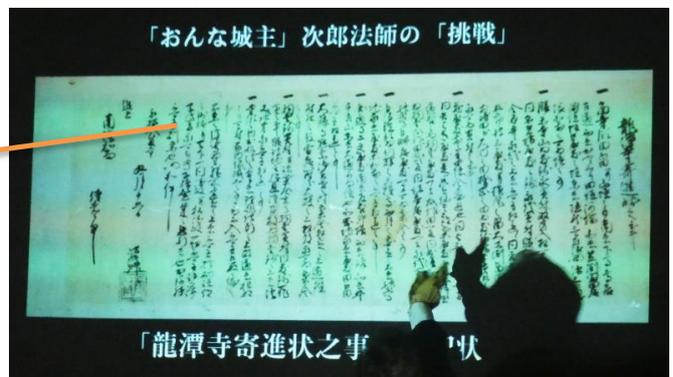
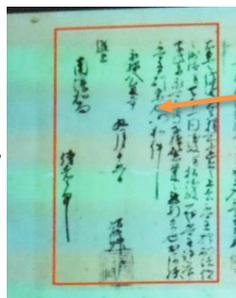
藤七郎



〈参考〉

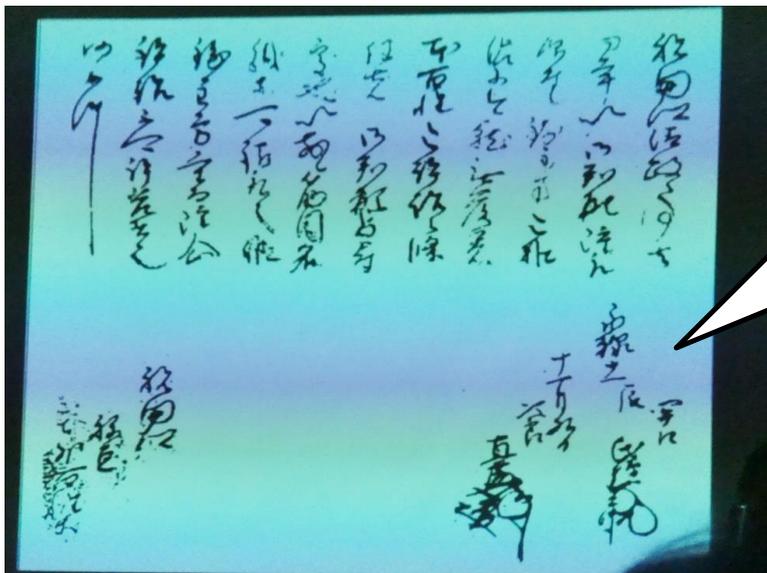
◆ 「おんな城主 直虎」の活躍

「天下一同」の徳政令も、「私」徳政令も、一切しません（許容あるべからず候）。とある。



- 次郎法師、永禄8年（1565）より、臨時の当主となる。（龍潭寺二世住職 南溪和尚の計らい）同時に虎松（後の井伊直政）の後見人になる。
- 龍潭寺寄進状…氏真による井伊氏支配地に対する「徳政令」（永禄9年 1566）に従わなかったことがわかる。しかし、小野道好による氏真への讒言があった。
- 永禄11年（1568）、氏真により徳政実行の誓書を認めさせられる（『蜂前神社文書』より「直虎」名の初見）。なお不実行を口実に、小野道好が次郎法師を追放、井伊城乗っ取り。虎松は、龍潭寺から鳳来寺に逃れる。

〈講演資料より〉



関口氏経 花押
 永禄十一年十一月九日
 次郎直虎 花押
 祝田郷 禰宜
 其外 百姓等

関口氏経… 今川家が派遣した井伊家の目付。今川家の意向を井伊家に伝えて実行させる役目。井伊家家老 小野道好を重用したのも関口氏経と考えられる。

最近、井伊直虎は本当は男だったのではないかという説も出ており、その根拠の一つとして、この「蜂前神社文書」で、“関口氏経と次郎直虎の連署している”ことが挙げられていますが、これは連署ではありません。
 関口氏経の花押の後に、『日付』が入っています。これは後から書いたということです。連署なら日付は最初に書かれるものです。真ん中に入ることはありません。
 直虎は「おんな」です。

◆井伊家の再興と、虎松（直政）の徳川家出仕

- 浜名湖が外洋とつながり、三河から遠州（浜松）へは、本坂・宇利峠を通る方法のみとなった。
- 「井伊谷三人衆」（菅沼忠次・近藤康用・鈴木重時… 苦しい時代に井伊家を支えた家臣）により徳川家康を導き入れ、井伊城を奪い返す。小野道好は捕らえられ獄門はりつけの刑に。直虎は再び井伊城主となった。

〔虎松〕

- 永禄11年（1568）の小野道好による井伊城追放以来、鳳来寺に隠遁する。鳳来寺は奥平氏の支配下。家老の黒谷氏によって匿われたのではないか。
- 天正2年（1574）、父である直親の13回忌を機に、井伊城に戻る（14歳）。実母の再嫁した松下家（頭陀寺城）に養子として入る。
- 天正3年（1575）、直虎や南溪和尚らの相談で、虎松の徳川家出仕を決める。家康は「初鷹野」で虎松と謁見、仕官を許す（300石）。井伊氏の名跡を継ぐ。
 初鷹野 = 初めての「鷹狩り」の意味。場所を示すものではない。

〈講演資料より〉

終了後、市橋先生の著書を紹介！（兵藤 作左の会会長）



2017年4月19日作成 文責；編集者
 〈講演資料〉は、当日配付資料から抜粋。
 〈「作左通信」から〉〈参考〉は、編集者の補足資料。
 他にも（ ）で、編集者補足説明挿入あり。

お疲れ様でした。<(_ _*)>